

タカシ・フジタニ著

『帝国に捧げられた人種』

——第二次世界大戦中の朝鮮人日本兵と日系アメリカ兵』

Takashi Fujitani. *Race for Empire: Koreans as Japanese and Japanese as Americans during*

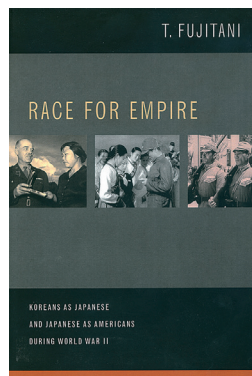
*World War II.* University of California Press, 2011.

シドニー・ルー(朝倉和子訳)

本書はアジア太平洋戦争における人種差別主義 (racism) とナシヨナリズムについての、太平洋をまたぐ研究である。日系アメリカ兵と朝鮮人日本兵の経験を比べたとき、敵国として戦った日米両大国の人種をめぐる言論には、違いよりも類似点が多い、と著者はいう。太平洋の両岸に対峙したこの二つの大国は、総力戦に向けて可能なかぎりの人的資源を動員するために、いずれも意図的に人種差別的な言辞や政策を回避し、マイノリティや被植民地人に対して人種的寛容政策を推進した。

この膨大で高度な研究を凝縮して語るのはたやすいことではない。だがここで著者が特に強調するのは、日米いずれの国でも、

戦時動員の必要性から、人種論議が「露骨な人種差別」(非人道的で排他的な形をとる人種差別) から「上品な人種差別」(人道的で寛容な形をとる人種差別) へ転換を余儀なくされた点である。後者は少なくとも言辞のうえでは人種差別を回避し、これまで蔑まれてきた人々を自国の社会に(朝鮮人を帝国日本に、日系米人をアメリカ社会に) 迎え入れた。この「上品な人種差別」という観念を理解する中心軸となるのは、フーコーのいう「生権力」(bio-power) および「統治性」(governmentality) という概念、つまり国民に繁栄と自己能力獲得の機会を与える実際的な国家権力である。日米いずれの政権も、これまで人種的に排斥されていた人々を別の特権集



団に繰り込むことによつて、彼らを総力戦体制の存続と勝利のため自ら命を捧げて捧げる有益な国民に変えようとした。

本書は人種やナシヨナリズムをめぐる論議を既知のものにとらえず、むしろ、そのような論議を生む政治力学を、戦争という文脈で分析する。このテーマに関する標準的な歴史叙述は、三つの国家のそれぞれ異なる歴史パラダイム——つまり朝鮮史における利敵行為（親日）、日本史における純血に基づく人種差別主義、アメリカ史における日系米人のヒロイズム——に影響されてきたが、本書はそうした標準的な既存の史観に挑戦し、戦時の人種論議について日米の類似点を取り上げることによつて、フーコーのいう国家権力モデルつまり「自己統治」という統治（governing of self-governing）が、総力戦のピークにおいて地球規模のヘゲモニーを獲得し、さらに戦後の世界を規定し続けていると述べる。

第一・二章では、朝鮮人日本兵と日系人アメリカ兵の意外な類似経験を通じて、太平洋兩岸の二つの総力戦体制が「露骨な人種差別」から「上品な人種差別」への変貌に収斂していったことを示す。朝鮮人は人材利用という総力戦のロジックによつて帝国の受益者予備軍に迎え入れられ、同様にアメリカの日系移民は、国家への忠誠心を示し、アメリカ人として同等の処遇を受ける機会を与えられて、総力戦においても戦後のアジア太平洋の覇権においても、異なる人種の人材を国家が活用できることを示す格好の

モデルとなった。

第三・四・五章では、日系アメリカ人の強制収容と軍事的ヒロイズムについて、これまで書かれ記憶されてきたことに根底から挑戦する。まず第三・四章では、徴兵・登録というアメリカの国策、そしてそれに対する日系人収容者のさまざまな反応を通じて、彼らがフーコー的な意味でいかに自由な国民に変えられたかが検証される。強制収容所の日系人青年が軍隊に「志願」できるようにすること、国家は、戦時動員の模範的マイノリティとして彼らのイメージを意図的に利用したことが示され、また第五章では、戦後数十年にわたる日系アメリカ人の軍事的ヒロイズムの記憶が、アメリカの多人種的ナシヨナリズムとアジア太平洋地域におけるアメリカのヘゲモニーの形成に、重大な役割を果たしたことが、そして日本がこの地域の忠実かつ模範的な国家であり続けたことが語られる。

最後の三つの章では、朝鮮における一九三七〜四五五年の日本の植民地支配のさまざまな様相を探る。まず第六章では、朝鮮人を有益な国民に変えるために、日本が用意したさまざまな権力への接近手段が語られる。この実際の統治手段は、当初それに合意するのを拒んだ朝鮮人にも複数の機会を与えるほど寛容で開かれたものだった。第七章では、戦時中の日本が朝鮮人を人種的に排斥するのではなく、むしろ包含しようとしたことが示される。こ

こからわかるのは、それが、リベラルで反ファシズム的な欧米世界が「辺境と文明」として描いたハリウッド的な表現と驚くほど似ていることだ。第八章では、さらに公共メディアに現れる家族やジェンダー、そして同一人種内での結婚といった表象を通じて、日本が朝鮮人を人種的に包含しようとしたと分析する。最終章「エピソード」は、戦後の日米両国における戦争の記憶という政治学の観点で締めくくられる。日米それぞれの国において「民族」として括られた兵士たちは戦後に対照的な運命をたどったが、総力戦のなかに登場した「上品な人種差別」という概念は、太平洋をはさむこの両大国の戦後社会を、それぞれ異なる方法で形成し続けた。

この研究は、政府や軍の記録文書、回想録、映像のほか、日本語・韓国語・英語による聞き取りを含む多国籍・多言語にわたる資料をふまえた、堅実で慎重な歴史調査に基づいている。また、日朝（韓）米の歴史についての三カ国語による保存文書を先駆けとして紹介し、人種・ナショナリズム・アジア太平洋戦争とその記憶についての解釈を根源的に変えるものである。これら三カ国についての関連テーマを研究する学者、および人種・戦争・ナショナリズム一般に興味を持つ誰にとつても、本書は必須文献である。フジタニ編 *Perilous Memories: The Asia-Pacific War(s)* (2001) ならびに近年発表された刺激的ないくつかの論文に続く本書は、

アジア地域研究とアメリカの民族研究とをつなぎ、比較の視点と国際的視野から、一国家の歴史記述の枠を超えた労作である。